

偶然の連鎖 (2)

「吉田先生との 20 年目の再会」

平成 28 年 6 月

始めに、吉田安夫先生について紹介しておきたい。

埼玉県が生んだ日本卓球界の重鎮で、行く先々で選手を育成、チームを強化、至短期間で県や国の大会で覇を競うまでに鍛え上げる名監督。大小大会での優勝回数は100回を超えと言う。あの有名な荻村伊知郎も先生の指導を受け、又今を時めく福原愛も幼い頃から先生の薫陶によって開花したのである。

先生との最初の出会いは、今から約30年前、お互いの人生再出発の時である。県高校ラグビー界きっての名監督「森喜雄」先生もご一緒であった。新しい職場・埼玉大深谷（現正智深谷）高校でお二人と初めてお会いし、その後10年の知遇を得て、また同時に退職した。両先生は同校からの要請を受けて転じてこられたのではないかとおもっている。

着任後の両先生は、素晴らしいの一言に尽きる。県の底辺で喘いでいたチームが急に息を吹き返し、数年を経ないうちに県のスターダムにのし上がり、更に全国制覇を夢見る処までに選手を育成し、チームを強化されたのである。その間私は文字通り十年一日「サインコサイン夢の中。微かに分かれば次積分」の繰り返しに終始した。

10年後三人とも同時に退職。それぞれ第三の人生へ。吉田先生は、次の選手育成を目指して青森山田義塾へ。新天地で再び福原はじめ多くの世界的名選手を育てられる。私は乞われるままある塾で、再び「サインコサイン・・・」の世界へ。

吉田先生との20年ぶりの再会も。奇跡の連続だった。

4月下旬、深谷での探花会に初めて参加した時のことである。当日行事のホスト役として深谷の老舗旅館「きんとう」のご主人石川氏が車の提供から食事まですべてを引き受けて下さっていた。その車が途中寄居県道に入った。踏切を超えれば合坂で、その近くにかつての勤務校が建っている。

学校はすっかり変わり、立派な建物が県道全面までせり出していた。誰にともなく独りごとのように呟いた。「随分立派になったな！勤めていた20年前には何も無かったのに」

前の補助席にいた石川氏が、それを聞いて問いかけてきた。以下、同氏との対話の要旨である。

「20年前にここに居られたのですか？それでは吉田先生をご存知ですか？」

「ええ、知ってますよ。卓球でしょ。先生とは10年間一緒でした。とてもいい先生でね。ところでどうして先生を？」

「先生はよく合宿でここを使って下さっていたんですよ。特に大きい試合の前

には必ずと言っていいくらいね。森先生もね。選手たちも、生き返ったように元気になって、試合に向かって行ったんですよ」

—知らなかった！両先生とも試合の前には殺風景な檻から選手を開放し、心身ともにリフレッシュさせて試合に臨ませたその細やかな心遣いを—
石川氏の話はつづく。

「実はね。私も先生の教え子の一人なんですよ。家業の関係で最後まで続けられなかったが、インターハイも参加したことがあります。先生は今でも時々お遊びに見えますよ・・・」

「そうですか？素晴らしい先生でしたね。こちらに帰っておられるなら、またお会いしたいな」と私。

話はここで一端終わった。花見物も終わり「きんとう」に向かう車中で店と打ち合わせをしていた石川氏が突然「先生。実は今吉田先生が宿に見えているのですが、お会いになりますか？」と、あまりの偶然さに驚きながらも「吉田先生のご都合さえよければ是非」吉田先生は玄関で私を迎えて下さり、20年ぶりの再会となった、その時の固い握手と抱擁は一生忘れることはないだろう。偶然が偶然を呼び幾多の偶然が一つの結末を招く。その結末の吉凶は最後まで判らない。でも私は、ここ2年ほどの間に会のイベントを通じて2回も同じ様な体験をした。偶然の連鎖が20年ぶりの再会と言うまさに奇跡ともいべき喜びを私に与えてくれたのである。

以下独り言

より良い偶然のリンクを求めて、これからも多くの人との触れ合いを大切にしていこう。

須田 元三（鴻巣市在住）

※偶然の連鎖（1）は平成28年4月